

会 議 記 録

高松市附属機関等の会議の公開及び委員の公募に関する指針の規定により、次のとおり会議記録を公表します。

会 議 名	令和 5 年度 第 2 回高松市文化芸術振興審議会
開催日時	令和 5 年 9 月 2 5 日(月) 1 9 時 0 0 分～ 2 1 時 0 0 分
開催場所	高松市役所 1 1 階 1 1 0 会議室
議 題	(1) 第 3 期高松市文化芸術振興計画の素案について
公開の区分	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 一部公開 <input type="checkbox"/> 非公開
出席委員	青山委員、金川委員、鹿庭委員、北岡委員、橋本委員（会長）、三木委員、水嶋委員、若井委員 計 8 人 （欠席 7 人 甘利委員、鎌田委員、木ノ下委員、島田委員（副会長）、多田委員、田中委員、林委員）
傍 聴 者	1 人 （傍聴席 4 人程度を確保）
担当課及び連絡先	高松市文化芸術振興課 0 8 7 - 8 3 9 - 2 6 3 6

審議経過及び審議結果
<p>会議を開会し、次の議題について協議し、下記の結果となった。 審議会の公開・非公開について審議がなされ、公開の決議がなされた。</p> <p>(1) 第 3 期高松市文化芸術振興計画の素案について 第 3 期高松市文化芸術振興計画の素案について事務局から説明し、次のとおり意見があった。</p> <p>(委員) 「P D C A サイクルによる計画の推進」の旧案から、新たに「より効果的かつ長期的な評価方法を検討していきます」という形で表記されているが、どのような方式をとるかは今後検討するのか。</p> <p>(事務局) 前回の審議会で、P D C A サイクルが時代に即していないという御意見があった。D X の時代になっているので、それらを活用して定期的な指標の進行管理をすることも可能だと考えている。事業を継続的に取り組む中で、審議会での御意見やアンケートの結果等を踏まえながら、方向修正ができればと思っている。また、新規展開に繋がりにくいという点が、この P D C A サイクルの現状だと思うので、その点も検討すべきだと思っている。次回の審議会において、形のあるものにしたい。</p> <p>(委員) 子育てしながら文化芸術活動を続ける人が増えており、託児の支援があれば助かる。子どもを預ける先がないという理由で活動できない人もいるので、「誰もが参加できる」という視点で、託児支援について検討してほしい。</p> <p>(事務局) 参加者に対する託児支援はあるものの、活動者に対する託児は取組として十分に考えられてなかったため、検討する必要があると考える。</p>

また、社会的包摂の観点からは重要だと考えている。障がい者に限らず、高齢者や小さな子どもがいる保護者の方が参加しやすい環境づくりをする必要があると考える。

（委員）

コロナ禍を経て、文化芸術が一般の方々の生活に必要なということが、計画の中から、一般の方々に伝わっていくと良い。

（事務局）

コロナ禍では、文化芸術に接することができなかつたり、活動される方が活動できなかったりということがあったので、その点を踏まえて、次期計画ではポストコロナを見据えた取組について記載している。

市民の方に読んでいただいて、その点が感じられるようなものにブラッシュアップしたい。

（委員）

文化庁の文化芸術推進基本計画（第2期）を踏まえながら、高松市文化芸術振興計画を立てていくというところがベースになるが、文化芸術推進基本計画（第2期）には「価値創造と社会・経済の活性化」というサブテーマがついている。コロナ以降、経済的に非常に落ち込んでいる日本社会の現状を踏まえてという部分もあるのかもしれないが、文化芸術の中に社会・経済の活性化という文言が使われていることに少し違和感がある。その部分はどのように計画の体系の中に盛り込まれているのか教えてほしい。

（事務局）

文化庁の文化芸術推進基本計画（第1期）で、これからは、文化芸術を通じて質の高い経済活動を実現していくということが謳われていて、そこを少し踏まえてはいる。文化芸術が持つ本来の力、市民の方が楽しみにされるものをどう生かしていくかということが大事だと思っており、表記については検討する。文化庁も、価値あるものを活用していくという意味で言っていると思うが、それが結果的に経済に繋がっていけばと思っている。

（委員）

第2期計画を検証した上で、次期計画に織り込んでいくというお話だったと思うが、現状値が17%と非常に低かった「自分自身が文化芸術活動をした人の割合」の目標値を30%に上げるのは、非常に難しいと思う。自分が主体的に文化芸術活動をするための具体的方策としては、どのようなことがこの計画の体系の中に入っているのか教えてほしい。

（事務局）

コロナ禍がなければ、現状値が平成30年度の17.5%から25%になっている想定で、さらに高みを目指すという考え方で、敢えて高い目標に設定している。その方策としては、地域アーツカウンシルの取り組みが重要で、専門人材を置いて、活動する方が十分に相談・助言を受けられるような組織を作り、中間支援を行うことで活動者を増やしていく、活動者が活動しやすい状況にするということが大きなポイントだと思っている。

（委員）

4つの方針の方針1「はぐくむ・いかす」にある、人材の育成や次代を担う子どもの育成といったところに、新しく文化芸術活動を始める人が増えてこない、30%という目標は厳しいのではないかと思う。例えば、方針2「であう・ひろがる」の中には、文化芸術ホールと美術館が入っているが、方針1「はぐくむ・いか

す」の中には文化芸術ホールが入っていないが、これはなぜか。

(事務局)

活動している方がより活動しやすい状況にするだけでは数値は上がらないのかも知れない。今まで活動されていない方が文化芸術活動に繋がっていくような取り組みが必要だと思うので、次回の審議会では、その辺りを踏まえたものにしたい。地域アーツカウンシルの取り組みだけでは十分ではないのかもしれないが、文化芸術を鑑賞したり、参加したりすることによって、自ら活動したいという方が増えるかと思うので、関連付けて、活動が活発になるようにしたい。

(委員)

前回の数値目標を定めるときに、国の目標が出ていたと思うが、今回はまだ出ていないのか。

(事務局)

まだ出ていないため、そこはまだ踏まえていない。コロナ禍がなければ目標値に近づいていたという希望的観測のほか、地域アーツカウンシルも立ち上げるので、決してかなり高い数字ではないと思っている。

(委員)

「障がい者を始め、誰もが参加できる文化芸術活動の支援」について、障がい福祉サービス事業所に派遣することは、インクルーシブではない活動が多いように見えるので、次期計画では、全体の中に普通に入ってくれるような表現や計画目標があればよいと思う。

(事務局)

福祉関係の事業については、ハートアトリンクや芸術士派遣事業のほかにも、新たな取り組みができるかどうか関係部署と相談したい。

(委員)

第2期計画の検証というところで、何を解決していけばよいのかというのが、数字によって隠れてしまっているという印象がある。数値よりも各事業の小さな課題が大事であるため、それを1つずつ改善していくことが、達成率の見える化に繋がると思う。検証方法を検討いただきたい。

(事務局)

毎年、取り組みについての各課の予算や課題点を表にまとめて説明しているが、その課題が解決されているのかは十分に把握できてない。課題をいくつ解決できたかや逆に新しいことができたなど、今後進行管理していく上では必要な点だと思う。

(委員)

新しい文化芸術に関する支援ももちろん必要だが、伝統芸能に関しては担い手の高齢化が進んでいて、消えてしまいそうなものも多くある。伝統芸能の保存等に関しては計画のどこに盛り込まれているのか。

(事務局)

方針4「つたえる・たのしむ」(1)地域特有の文化の継承と創造に盛り込んでいる。特に③地域の魅力を再発見し郷土愛を醸成というところで、郷土の伝統文化に触れそれを将来に発展的につなぐことが重要としている。これは文化財だけではなく、地域固有の民俗芸能等数多くのものがあるので、わかりやすい表現の工夫を検討する。

(会長)

計画の中に子どもの文化芸術の育成は盛り込まれているが、子どもというのは何歳までのことか考えている。計画に大学生までに関しては盛り込まれているが、支援の年齢を少し上げてほしいと感じている。

そういった人たちを支えるとか、何か発見するとか、そういう人が表現できる場を作っていくとかという、その視点もあって良いと思う。

(委員)

高松は転勤族が多く、地域の繋がりが弱い。

働き盛りの方、親の世代が、地域に入っていこうという姿勢の、生まれるような、そういう事業というか、考え方をちょっとできたらなど、そこを変えない限りなかなか次のもう一つ上の段階にはいけないかと思う。

(委員)

大学生以上の世代が、何に興味を持って、共通意識を持っているかというのがあがる。私たちの考えている文化芸術とは違う角度の文化芸術を何か見つけられたらよいと思った。

(委員)

高松は文化芸術の芯みたいなのがないが、逆にニュートラルで、なんでも寛容で受け入れられるっていうことを、この一つの強さにしていくっていうのもありだと思う。

(事務局)

今後、地域アーツカウンシルを有した高松版文化芸術プラットフォームを活用し支援等に繋がればよい。

(委員)

親子でするワークショップがすごく好評で、親子で向かい合ってもらって、お母さんが参加して経験をして、また家帰って、会話ができて、近所周りでもね、話が広がっていくことが非常に良かった。そのような取組が出来たらよいと思う。

(事務局)

ワークショップは対象を絞ってやるのが多く、親子でやるものが少ないが、親子で体験できるようなものを取り入れていくことによって、家に帰ってからも振り返ることができ、親や子は自分のお友達にそれを伝えてまた広がっていく。

そういった観点は大事だと思う。

(委員)

計画の中で、自分で企画をして挑戦する場ってというのがこの中にはない。

例えば、年に1回でもこの日は、サンポートホールの小ホールが自由に使えるので面白い企画を持ってきてください。その中から一つ、選びますみたいな、文化芸術を自由にできる場みたいなそういう機会の創出があれば良いと思う。

(事務局)

美術館のエントランスは昨年度から、公募制の市民の方の発表の場にしており、昨年度は四つの団体が音楽活動をしている。

美術館以外の施設でも同様の事は可能だと思う。

以上